

<p>1 学校教育目標</p> <p>「未来へかがやけ 蟹っ子！」</p> <p>～笑顔いっぱい、生き生きと学び合う児童の育成～</p>	<p>2 本年度の重点目標</p> <p>〇学び続ける子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に自主的に学習に取り組む。 ・じっくり考え、相手に伝わるように表現する。 ・進んで読書をする。 	<p>〇思いやりのある子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当たり前前が当たり前前に行ける。 ・自他をよさを認め合いながら助け合う。 ・地域に学び、地域を愛する。 	<p>〇たくましい子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進んで心と体を鍛える。 ・規則正しい、健康的な生活を送る。 ・食事のマナーを身につけ、残さず食べる。 ・危機を回避する。
---	---	--	--



<p>3 目標・評価</p> <p>①学び続ける子ども(知)「学力向上」</p>	<p>※ 評定は、ABCの三段階で</p> <p>年度末評価(2学期末評価)</p>
---	--

領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	中間評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
教育活動	〇学習習慣の定着	基本的な学習習慣の定着	・日常の指導及び「学び続ける子 10か条」を意識づけることにより、学習に集中して取り組み、話をしている相手を見て最後まで聞くことができ児童90%を目指す。また、進んで発表しようとする児童80%を目指す。 ・「家庭学習にきちんと取り組んでいる」と答える保護者90%を目指す。	・話を聞く習慣づけの徹底指導、および、発達段階に応じた発表指導を工夫する。 ・「読む」「書く」「計算」の宿題を継続的に取り組む。 ・「家庭学習の手引」「市学びの習慣づくり」等の保護者への配布・説明を行い、学校・家庭が連携して取り組む。家庭学習に自学ノートの活用を促すために、良いノートを紹介したり、保護者にも啓発したりする。 ・定期的な「蟹っ子カード」(生活点検表)を実施し、親子で学習・生活習慣を見つめ直しながら、望ましい学習・生活習慣の定着を図る。	A	〇話を聞く習慣づけができていた児童、保護者は増えている。毎月の学習目標と関連させて指導したことが効果につながった。 〇算数科を中心としたグループタイム、みんなでタイムの指導を通して、進んで発表しようとしている児童の割合が増えた。 〇家庭学習については、上手な自学ノートの指示や各学年での工夫した取組(自学発表会など)、月の学習目標の設定などの工夫によって、家庭学習の取組が着実に定着してきた。 〇蟹っ子カードの取組によって、親子で学習・生活習慣の定着を図ることができた。	・これまでの指導を継続して行っていく。 ・自学ノートの内容については、興味・関心からの学びだけでなく、学習内容の復習を中心とした学びにつなげていきたい。 ・放課後の補充学習を月2回程度実施していく。担任だけではなく、管理職をはじめ、級外職員も基礎的・基本的な内容の定着のために指導を行う。
	●学力の向上	算数科における思考力及び表現力を育てる指導方法の工夫	・算数科において、児童の思考力・表現力を高めるための授業づくりを通して、活用力を育てる。 ・算数科の学習状況調査・標準学力検査において、各学年県および全国平均以上を目指す。	・思考力・表現力を高めるために、授業の中に主体的・協働的に学び合う活動を取り入れる。 ・児童の興味・関心・意欲や思考を引き出すための教材の研究・開発を行う。 ・児童の実態に応じた少人数指導・TT指導を充実させる。 ・計算タイムや補充学習において級外職員も加わり、全職員で指導に臨む。	A	〇自分の考えを持たせるための手だてやグループタイムなどの学び合い活動を意図的に取り入れたことで、9割の児童が自分で考えたり、書いたりすることができていたと答えている。 〇計算タイムや補充学習など、全職員できめ細かな指導をすることで児童の学習意欲が高まった。 〇12月の学習状況調査では、多くの教科で県の正答率を上回ることができた。	・算数科に限らず、他の教科にも意図的に学び合う活動を取り入れることで思考力・表現力を伸ばす。 ・児童の実態と単元の内容に応じた少人数指導も工夫と充実を図る。 ・今後も月ごとの学習目標を設定し、その月の学習チャンピオンを賞賛していくことで、全校的な気運を高めていく。
	〇読書指導	読書指導の推進	・年間100冊の読書を達成する児童100%を目指す。 ・いろいろなジャンルの本に興味関心を持つ児童を増やす。 ・毎月「ノートルレ・ノートルゲーム」を実施し、読書の実施率を60%以上にする。	・100冊達成した児童を壁の放送で紹介する。 ・教師や保護者ボランティアによる読み聞かせを実施するとともに、図書館祭りの機会を利用して、読書の幅を広げる。また、「嬉野市校長先生の知恵袋事業」を活用して、ハッピーパスデーブックを実施する。 ・「親子読書回覧板」を実施し、家庭でも読書をするきっかけを与える。 ・ノートルレ・ノートルゲームについては、保護者にも協力を呼びかけ、家読を勧める。	A	〇年間100冊を達成した児童は、2月16日現在125人/135人で、年度内には100%達成できそうである。図書館祭りを3回に分けて行ったことで読書する児童が増えた。 〇いろいろなジャンルの本に興味・関心を持つように、「分類ペンゴ」を実施したことによって多くの児童が物語以外の本を借りて読んだ。 〇嬉野市校長先生の知恵袋事業を活用し、1/2成人式でハッピーパスデーブックとして4年生全員にお気に入りの本をプレゼントし、読書への意欲の喚起につながった。	・「図書館祭り」は今後も「あじさい祭り」「図書館祭り」「雪まつり」の3回に分けて実施する。 ・「親子読書回覧板」や「ノートルレ・ノートルゲーム」や「ハッピーパスデーブック」などの今年度の取り組みを継続して実施していくとともに、内容の充実を図ることで、読書好きな児童をさらに育成していく。
	●ICT活用教育の推進	ICT活用教育指導の推進	・コンピュータや電子黒板、インターネット等を活用して、授業に主体的に取り組む児童を増やす。	・教職員がICTを活用した実践的な教育活動を行うことができるように職員研修の充実を図る。 ・情報化推進リーダーを中心とした校内研修体制を整える。	B	〇電子黒板、デジタル教科書などの活用を通して、児童が意欲的に学習に取り組むことができた。 △児童のICT活用を促すための教師の研修は十分ではない。(パソコン室の利用)	・情報教育専門官等と連携を図りながら、職員の研修をさらに充実させる。

<p>②思いやりのある子ども(徳)</p>	<p>年度末評価(2学期末評価)</p>
------------------------------	----------------------

領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	中間評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
教育活動	〇基本的な生活習慣の定着	奉仕・協力・勤労などの精神や態度の育成	・礼儀正しい児童を目指す。 (あいさつ・返事・言葉遣い・無言掃除・靴並べ・廊下歩行)	・「あいさつ運動」を実施することで、あいさつや返事を上手にできる子をほめ、常に意識させる。 ・掃除の手順や用具の使い方指導を徹底させる。 ・掃除強化月間を設け、全校で重点的に取り組む。	B	〇元気な挨拶や返事ができている児童が増えた。 〇無言を意識しながら掃除に取り組む児童が増えた。 △はうきや雑巾など、掃除用具の使い方については、より一層丁寧に指導する必要がある。	・元気な挨拶や返事については、今後も年間を通して重点目標に位置づけ、継続的な指導を行っていく必要がある。 ・児童を中心としたあいさつ運動を展開し、職員が励ましていることで意識を高めていくようにする。 ・月ごとの生活目標を設定し、生活チャンピオンとして認めていく。
	●心の教育	思いやりの心の育成	・道徳教育の充実	・自分や友だちを大切に、思いやりの心をはくむ学級活動や道徳の授業を大切にすること。 ・人権集会や平和集会を行うこと、人権・同和教育や平和教育の推進を図る。 ・コミュニティとの連携を図り、体験活動を充実させる。	A	〇平和集会や感謝の会、児童集会などで児童の出番の機会を多く設定したことで、人前でも自信をもって話すことができるようになるなどの達成感を味わわせることができた。 〇上記の集会を通して、相手の立場を考慮することや協力し合うこと、感謝することなど、相手を思いやる意識を体得させることができた。	・平和集会や感謝の会、児童集会などの活動を通して、今後も児童の出番を増やしたり、達成感を味わわせたりしながら、互いに認め合う心を育む。
	●いじめの問題への対応	多くの目や手をかける学校及び学級経営	・一人一人のよさを認め合い、いじめのないクラスづくりを目指す。 ・学級が孤立しないよう、同一歩調の指導を行い、「学校が楽しい」と言える児童95%を目指す。 ・「予防、早期発見、早期対応、再発防止」を念頭に置き、事案が発生した場合には、組織として迅速かつ丁寧に対応する。	・自分や友だちを大切に、思いやりの心を育む学級活動や道徳の授業を大切にすること。 ・いじめアンケートを定期的に実施するとともに、教育相談週間を設定する。 ・QUTテストを2回実施し、結果を活用し学級経営力を高める。夏季休業中に職員研修を行う。 ・職員間において「報告・連絡・相談」を徹底させるとともに、校内いじめ防止対策委員会を開催して、迅速に対応する。また、週に1回行っている「支援を必要とする子の情報交換」を充実させ、職員間の共通理解を図る。	A	〇年間2回はいじめ防止対策委員会を開くことで、いじめ防止に対する意識向上に学校と地域が協力が協力が協力ができた。 〇QUTテストや心のアンケートを実施することを通して、児童の気持ちを捉えることに全職員で組織的に取り組むことができた。 〇いじめに関する認知は数件あったが、継続性はなく、認知までには至っていない。 〇学校が楽しいと感じている児童が、目標の95%近くまで達することができた。	・QUTテストや心のアンケートを継続して実施する。また、週に1回の「気になる子ども」の情報交換を必ず行い、児童の些細な変化も見逃さないようにする。 ・学校が楽しいと思っていない児童については、その原因や背景となる要因をいち早く捉えることで、学校と家庭との連携も深めながら、児童の立場に立った取組を進めていく。
	〇特別支援教育	支援体制の確立	・特別支援教育に関する専門性を高めるために年に3回の校内研修を行う。 ・支援を必要としている子を把握し、個に応じた支援を行う。 ・特別支援教育に関する共通理解を図る。	・関係機関と連携し、専門の講師を招聘して職員研修を行う。 ・児童一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高めるため適切な指導及び必要な支援を行う。 ・個別の支援計画を作成し、個に応じた指導を行う。 ・年度当初の必要に応じてケース会議を行い、共通理解を図る。	A	〇3回の校内研修を行い、特別支援教育に対する研修を深めることができた。 〇巡回相談やSC、教育相談員などの関係機関と連携を図りながら、支援にあたることもできた。 〇個別の支援計画に沿った支援を行った。	・全職員の共通理解を図りながら、支援を要する児童の教育にあたる。 ・関係機関とさらに連携を図る。 ・校内研修をより充実させていく。
	●特別活動の充実	自主的・自発的な態度の伸長	・集会活動や縦割り班活動を通して、思いやりのある心、自己有用感を高める。	・学年や全校の場で出番をつくり、達成感を持たせる。 ・縦割り班活動の推進によって、高学年のリーダー性と思いやりの心を育む。 ・集会活動や学習発表会を通して、友だちのよさを認め合う。	B	〇平和集会や児童集会などで、児童の出番を多く作り、達成感を持たせることができた。 〇縦割り班活動を通して、高学年としての意識を持ちながら行動できる児童が増えた。 △自主的に行動できる場を十分設定することができなかった。	・集会活動などにおいて高学年の出番を増やしていき、自主性を育てる。
	●小学校低学年の学習環境改善の充実	基本的な生活習慣、学習習慣の定着	・あいさつや返事が元気にできる児童90%を目指す。 ・毎日宿題をきちんとできる児童90%を目指す。	・あいさつや返事を上手にできる子をほめ、常に意識させる。 ・決まった量の宿題を出し、宿題その日のうちに点検し返すようにする。 ・保護者と連携し、協力を得て達成する。	B	〇自分から進んで挨拶ができる児童が増えた。 〇宿題は朝のうちにほぼ100%の児童が提出することができた。 △あいさつや返事の問題について徹底できていないところがあった。	・今後も全体指導や個に応じた指導を継続していくことで、さらに意識を高め、実践力を育てる。 ・個別指導を徹底していくことで、生活習慣の定着を図る。

③たくましい子ども(体)					年度末評価(2学期末評価)		
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	中間評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
教育活動	●健康・体づくりの推進	・心身ともに健康な児童の育成	・体育科の授業の充実を図り、運動が好きな子どもを育てる。(県教委の体力向上推進事業「さがんキッズスポーツチャレンジ」への参加) ・縦割り班での遊びの時間を使って、いろいろな遊びを経験させ、外遊びを奨励する。	・体育の授業作りについて意見交換をしたり、学習カードの共有ができていたりできるようにする。 ・体育委員会のスポーツレクリエーションの時間を使って、「さがんキッズスポーツチャレンジ」の全種目に全学年がチャレンジできるようにする。 ・掲示物や児童集会を使っているような遊びを紹介し、遊びの楽しさを味わわせる。	A	○新しい遊具や一輪車での遊び、マラソントイムやなわとび記録会の開催により、児童が体を動かす機会が増えた。 ○体育委員会が主催する「スポーツレクリエーション」の時間を使って、「さがんキッズスポーツチャレンジ」に全校で取り組み、天候の都合で取り組むことができなかった1種目を除き、ほかの5種目には参加することができた。ほとんどの学年で昨年の自分たちの記録を更新することができた。 ○体育委員会の児童が集まていろいろな遊びの紹介を行った。	・今後も「運動が好きな児童の育成」を目指し、スポーツチャレンジに何度も取り組んでいくような呼びかけや、記録用紙の工夫を行っていく。
	○安全対策	危機管理及び安全対策の強化	・自分の身は自分で守るという意識を持つ児童を育てる。 ・登下校のみならず、外出時の防犯ブザーの所持率を100%にする。 ・交通ルールを守り、自転車の正しい乗り方ができるようにする。 ・「生きる力」の教科書等を活用し、生きる力を育成する。	・関連機関と連携し、不審者対応避難訓練や交通安全教室を実施する。 ・学級活動、全校朝会等の機会を活用し、自転車の乗り方や身の安全を守る方法を指導する。 ・登校時のPTAや交通指導員の立ち番、下校時の見守り隊との協力体制を維持・継続する。	B	○不審者対応避難訓練や交通安全教室を行ったことで、「自分の身は自分で守る」という意識を高めることができた。 ○登校時のPTAや交通指導員の立ち番、下校時の見守り隊との協力で児童を見守ることができた。 △登下校時の防犯ブザーの所持率が100%に達していない、昨年度と今年度の学校評価アンケートを比較すると、0.1ポイント下がっている。	・学級通信などで防犯ブザーの所持や、電池交換の呼びかけをする。また、忘れた児童や電池交換の必要な児童には、呼びかけの紙を渡したり、声掛けをしたりして指導を行っていく。 ・安全意識をさらに高めていくために、全校朝会などで、児童の実態に応じて交通安全についての話をしていく。
	○望ましい生活習慣の形成	健康的な生活習慣の定着	・年間を通して、立腰・手洗い・うがい・歯みがきを実践し、自分で健康管理ができる。 ・ハンカチ・ちりがみ・つめ・かみの毛・朝ごはん等、習慣化できている児童を90%以上にする。	・手洗い・うがい・歯みがきを習慣化し、感染症予防に努める。また、学校歯科医・市健康づくり課と連携し、歯科保健指導をすすめる。 ・衛生検査を週1回実施し、結果を活用することで、習慣化を図る。	B	○年間を通して、予防に関しての様々な取組を行うことができた。また、関係機関との連携を図り、歯科保健指導も行った。継続的な取組として、定着してきている。 △取組はできているものの、それが習慣化できているかという点では、まだまだである。学校だけでなく、家庭との連携が不可欠である。	・Head部との連携を図り、蜜つ子カードの調査項目に加える等して、実践率を高める。また、衛生検査の実施についても、内容や方法を再検討する。 ・児童保健委員会を活用し、自分たちの問題として捉えさせ、活動の中で対策を考えさせ、取り組ませる。 ・保護者への情報や資料として、便り以外に、懇談会等でも知らせる。
	○望ましい食習慣と食の自己管理能力の形成	・食事のマナーを守り、好き嫌いなく食べる児童の育成	・食に関する知識と関心を持たせ、好き嫌いなく食べる児童を90%以上にする。 ・食器の持ち方や箸の持ち方、姿勢に気をつけるなど、マナー面での指導を徹底させる。	・学校栄養士による食育の授業や給食日より、給食委員会の発表などを通して、食の大切さを知らせる。 ・6月・11月に給食マナー週間を設け、日替わりでテーマを決めて正しいマナーを身に付けさせる。 ・栽培活動を通して、育てる楽しみを知り、食への関心を高める。	B	○6月・11月に給食マナー週間を実施し、食事をするときの姿勢、三角食べ、正しい箸の持ち方を啓発することができた。 ○12月の給食週間では、朝ごはんの大切さを再認識させることができた。 ○「給食だより」を発行することで、今年度の取り組みを保護者にも啓発できた。 ○夏野菜の栽培、全校でのさつま芋の栽培を通して、育てることそれを楽しむことができた。 △食事マナーや朝ごはんの大切さは啓発できたが、定着につながっていない。	・食育活動を通して、正しい食生活の定着を目指す。 ・朝ごはんの大切さを児童だけでなく「給食だより」を通して、保護者にも啓発し、喫食率100%を目指す。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目					年度末評価(2学期末評価)		
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	中間評定	成果(○)及び課題(△)	今後の方策
学校運営	○魅力ある学校づくり	地域・保護者と連携した児童の育成	・地域人材を活用した体験的な学習活動を行い、豊かな心を育成する。 ・地域関係団体、保護者等と連携して、基本的な生活習慣の徹底を行う。	・各学年に地域人材を生かした学習活動を教育課程に位置づけて実施する。 ・地域関係団体、県の機関との協議の場を設け、学校の教育活動について理解を求め、支援を要請する。 ・地域・保護者との連携で、あいさつ等の基本的な生活習慣の徹底を図る。	A	○学校の教育活動に対する支援だけでなく、地域コミュニティが主となって取り組む事業(平成29年7月九州北部豪雨に係る朝倉支援事業)についても学校が参加するなど、互いに連携を図りながら活動することができた。 ○学校評価の質問項目「お子さんは、あいさつや正しい言葉遣いができていますか」については、「よくあてはまる」「大体あてはまる」と回答した保護者の割合は、平成28年度末の結果に対して2.5ポイント上がった。	・連携を図る行事については、互いが無理なく活動できることを踏まえながら取組を進めることが必要となる。個々の行事については、その目的や内容を十分検討し、今後の取組に生かしていきたい。 ・あいさつ等の基本的な生活習慣については、数値だけでなくその質の向上についても、地域、家庭、学校が連携しながら取り組んでいく必要がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目